

プログラム名 (40字以内)	帰還困難区域の「街づくり」を考える。―復興に対する多様な「想い」に触れながら―		
団体名/所属	本学学生(活動指導教員:開沼博准教授)		
活動区分	フィールドワーク体験活動	希望する選考方法	書類審査のみ
募集人数	10人程度	選考対象	大学院学生を含む
活動方法	オンラインを活用しつつ現地活動を行う		
参加者に求めるもの	特になし(大学生、大学院生共に参加を歓迎する)		
活動期間	夏季休業期間中に断続的に実施する(詳細は「具体的な内容」に記載する)。	主な活動予定場所	福島県
プログラム実施の目的	復興における長期的な課題に対して理解を深めること。		
具体的な内容(800字程度)	<p>【企画概要】</p> <p>本プログラムは、東日本大震災・福島第一原子力発電所事故による被害を受け、現在も帰還困難区域に指定された場所が残る浪江町・双葉町・大熊町・富岡町へ実際に足を運び、役場職員の方々や現地に住まう方々への聞き取り等を通じて、当地域の「復興の過程」を再考することを目的とするものである。</p> <p>東日本大震災の発生から今年で13年が経過した。原子力発電所事故に伴い住民が長期・広域的な避難を強いられ、さらに避難指示の解除が比較的遅れた当地域は、他の災害では見られない特異な復興の過程を歩んできた。例えば、震災以前の住民の多くが未だ帰還しておらず、先行きすら不透明な時点で今後のまちのあり方を構想せざるを得ない状況が続いてきた。</p> <p>一方で、この復興の過程は、確実に次の段階へと進みつつある。まちには様々な施設が整備され、震災以前は地域と関係がなかったような移住者も徐々に増えてきている。ただ、地域における力強い動きが生まれてきている他方で、復興予算の縮小、まちで大きな役割を果たしてきた人々の高齢化や中間貯蔵施設など、今後解決しなければならない課題が山積していることも事実である。</p> <p>地域の内部で進む復興の歩みは、外部にいる私たちには見えにくい。例えば、随所に残る「帰還困難区域」の看板や処理水の問題など、「見えるもの」に焦点をあてて復興を捉えがちである。しかし、能登半島地震をはじめとした大規模な災害が続き、災害・復興へ注目が集まっている今、これまで進められてきた復興の内部にいる人々が持つ視点に触れることの意義は大きい。</p> <p>今、福島原子力被災地域で生活を送る人々の意識の中心には何があり、震災からの復興の過程は何をもちたらしめて、何をもちたらしめていくのだろうか。本プログラムでは、現地の人々に近い視点から復興の過程を捉え直し、今後の福島の復興の可能性や将来像を考察する。これまで福島・復興・災害にあまり関心がなかったような人でも参加してよかったと思ってもらえるようなプログラムを参加者とともに作り上げていきたい。</p> <p>【プログラム構成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 浪江町、双葉町、大熊町、富岡町の4町を対象として、現地視察および現地の方々へのヒアリング調査を実施する。 上記をもとにして、参加者同士で議論を行う。 自治体の方々等に対して、議論の成果をフィードバックする。 <p>※一昨年度のプログラムの様子は以下のURLよりご覧いただけます。 https://www.iii.u-tokyo.ac.jp/research/221004kainuma</p>		
【総額】参加するための費用	110,000円		
【内訳】参加するための費用(宿泊費)	50,000円程度		
【内訳】参加するための費用(交通費)	30,000円程度		
【内訳】参加するための費用(その他)	30,000円程度(現地活動費として)		
奨励金額(予定)	25,000円		
備考	特になし		
活動に関する関係資料のダウンロードサイト	なし		
応募団体を紹介するウェブサイト等(団体で応募の場合)			
この企画に対する担当者(応募団体の参加の有無)	参加する		